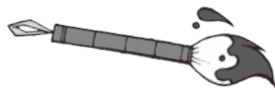


# 新・下野市風土記 「鬼滅」されない鬼たち



下野市教育委員会 文化財課

昨年から、主人公の少年が妹を救うために鬼と闘う漫画が大ヒットし、話題を集めました。最終巻の販売日には書店に多くの人が列をなしたことがニュースにもなりました。

日本の歴史研究者の中で鬼研究の第一人者である小松和彦氏（国際日本文化研究センター名誉教授）は、「鬼が流行した時代はいずれも世情が不安定な時代である」と述べています。

では、鬼はいつから出現したのでしょうか？

飛鳥・奈良時代に編さんされた『日本書紀』に「鬼」という語が記されています。しかし、ここに登場する鬼は、頭に角、口に牙を生やし、クルクルの髪で虎皮のパンツを履いている赤や青の鬼ではありません。『日本書紀』に最初に登場する鬼は、得体のしれない神や物の怪のような存在で、目にはっきりと映る対象ではなかったようです。

余談ですが、『日本書紀』や『古事記』には、鬼の他にも、ヤマタノオロチや天狗、人魚が、『出雲国風土記』には一つ目の鬼が登場します。

奈良時代以前の鬼は、どちらかという神が墮落して鬼になるとされていたようで、神と近いものとして表現されています。それが平安時代になると、怨念や怨霊などと関連付けて表現されるようになります。

平安時代の初めの頃に登場する有名な鬼は、なんと女性が変身した鬼です。その女性とは、『古今和歌集』（905年）や『平家物語』（成立年不詳）、『源平盛衰記』（鎌倉末期～南北朝期）に

も登場する「宇治の橋姫」です。

現在も京都府の宇治川にかかっている宇治橋のたもとに祀られている橋姫は、最初は愛らしい清楚な女性として描かれます。しかし、愛する人を奪った女性に嫉妬し、貴船神社に7日間こもって「妬ましい女を取り殺したいので生きながら鬼神にしてほしい」と明神に懇願したところ、明神に「本当に鬼になりたければ21日間、宇治川に浸かれ」と告げられます。

橋姫は「髪を5つに分けて角のようにし、顔や体を赤く染め、頭に鉄輪を逆様に被りその3本脚にそれぞれ松明を括り付け、口には両端に火をつけた松明を銜え」て、夜になるとその姿のまま宇治川から都に戻って都大路を走りまわりました。

横溝正史の『八つ墓村』の冒頭の一説に出てくる丑の刻参りの原型は、橋姫の姿です。また、例の漫画の主人公の妹（物語の冒頭で鬼になってしまう）も竹をくわえた姿で描かれ、橋姫と通ずるものがあります。

鬼となった橋姫は、恋敵の女とその親族、恋人だった男とその親族を皆殺しにします。

源頼光の四天王の一人で、武門の誉れ高い源綱（渡辺綱）が都の夜間警護に派遣され、一条戻り橋で美しい女性に会います。危ないから家まで送りましょうと女性を馬に載せると、女性は鬼の姿に変身し、綱は鬼に掴まれ宙に浮きますが、頼光から預かった源氏重代の名刀「髭切」で鬼の腕を切り落とすと、綱と切られた腕は北野天満宮の境内に落下し、鬼は都の西の愛宕山へと飛び去りました。

髭切はこのことから「鬼切丸」と呼ばれるようになったとされ、今も北野天満宮に奉納されているそうです。

鬼が飛び去った愛宕山には、鬼の頭目である

酒吞童子やその一味がおり、頼光と四天王がこの鬼を退治する話は有名です。

四天王の一人、坂田金時（金太郎）のモデルは、宮中護衛武士の中でも優れた人材として後世まで名を残した下毛野公時だと言われています（下毛野朝臣古麻呂との関係は、残念ながら不明です）。ちなみに、きんぴらごぼうの金平は、金時の子どもの名が由来だそうです。

橋姫の物語は、『鉄輪』として能の演目にもなっています。こちらでは、橋姫が妬んでいた女と恋人だった男を殺してしまう前に、高名な陰陽師、安倍晴明によって退けられます。

おもしろい古典の要素が新しい作品の中に息づくのと同じように、不安定な世情において鬼は滅せず、何度でも生まれ来るものなのです。